

イラン情勢に関するシミュレーション および現実の帰結

放送大学 学部4年

大和田 茂

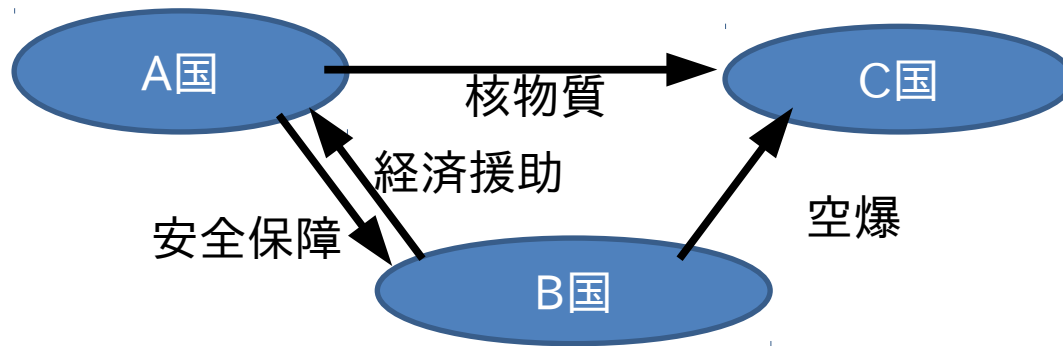
研究の目的

- イラン情勢に関する複数のシミュレーション結果を概説
- 現実のイラン情勢と比較・考察

なぜイランか？

- シミュレーションが行われた時期(2009年末)の直後から現実のイベントが次々と起こり(2010年初頭)、予測と現実の比較が速やかに行えるようになったため

国際政治シミュレーションとは



● :アクター。それぞれ独立に資源を持ち、独立に意思決定する

- 未来の国際情勢を予測するための手法
- 政治家や国家を表現するアクター(エージェント)を定義
- それぞれのアクターを自律的に行動させてみて、状況の推移と帰結を見る
- 資源の制約や、攻撃や交渉の成否などを制御する「コントロール」という役割も必要

イラン核問題の概要

- 1960年代 ドイツの支援により核開発開始
- 1970年代NPT加入・IAEAと包括的保障措置協定締結
- 革命後 ソ連(ロシア)・中国の支援で核開発継続
- 2002年 秘密の**大規模原子力施設が発覚**
- 2003年、2004年 EU3による交渉
- 2006年～2010年 **国連、各国により繰り返し制裁**
- 2010年2月 イラン大統領が20%濃縮成功を発表
- 2010年8月 **ブシェール原発の稼動予定発表**
- 2010年8月 米国が原発稼動を容認

3つのシミュレーション

- 2009年暮に、今後のイラン問題に関するシミュレーションが、相次いで三個所で行われた
 - 2009年11月1日 テルアビブ大学
 - 2009年12月6日 ハーバード大学
 - 2009年12月14日 ブルッキングス研究所

これらは全てコンピュータを使わず、国や政治家の役割を人間やグループが演じる「オール・パーソン・シミュレーション」である

シミュレーション結果

	テルアビブ	ハーバード	ブルッキングス
イランの核保有	核兵器まで保有	低濃縮ウラン生産倍増 兵器化もかなり進展	関連施設を破壊されたところからスタート
イスラエルのイラン攻撃	できない	できない	攻撃したという前提 その後はほとんど動けず
米国ーイスラエル関係	悪化	悪化	非常に悪化
国際的制裁の成否	失敗	ロシア・中国の反対により 失敗	---- 欧州はイランが関係した テロ攻撃にさらされる
米国の指導力	発揮できず	発揮できず	発揮できず 最後は軍事行動
イランの得失	核兵器保有 損なし	核開発大幅進展 ロシア・中国とのパイプ イスラエルの厳しい立場 損なし	国内の反対派の抑えこみ イスラエルの厳しい立場 核関連施設喪失

シミュレーション結果

	テルアビブ	ハーバード	ブルッキングス
イランの核保有	核兵器まで保有	低濃縮ウラン生産倍増 兵器化もかなり進展	関連施設を破壊されたところからスタート
イスラエルのイラン攻撃	できない	できない	攻撃したという前提 その後はほとんど動けず
米国ーイスラエル関係	悪化	悪化	非常に悪化
国際的制裁の成否	失敗	ロシア・中国の反対により 失敗	---- 欧州はイランが関係した テロ攻撃にさらされる
米国の指導力	発揮できず	発揮できず	発揮できず 最後は軍事行動
イランの得失	核兵器保有 損なし	核開発大幅進展 ロシア・中国とのパイプ イスラエルの厳しい立場 損なし	国内の反対派の抑えこみ イスラエルの厳しい立場 核関連施設喪失

結論

- 近年のイラン関係のシミュレーションは、未来を予測するための手法として有効に機能した。

テルアビブ大でのシミュレーション(1/3) 参加者

- ネタニヤフ: Giora Eiland
 - イスラエルの前国家安全保障顧問
- オバマ: Zvi Rafiah
 - イスラエルの元外交官。アメリカとの関係が深い
- ハメネイ: Aharon Zeevi-Farkash
 - イスラエル軍情報部の前チーフ
- オーガナイザー(コントロール): Emily Landau
 - INSSの上級政策専門家
- その他、現職のイスラエルの政府職員が含まれているとのことだが、名前は伏せられている。

テルアビブ大でのシミュレーション(2/3)

結果

- イランは核兵器を手に入れた
- イスラエルはイランへの単独先制攻撃ができなかった。また、外交的発言力を失った。
- 米国は、核開発を禁止する政策から、ウラン濃縮を許す政策に転換した
- イスラエルが仮にアラクの重水プラントで破壊工作を行った場合、イランはシリアとベネズエラに軍隊を送り、影響力を誇示しようとした。

テルアビブ大でのシミュレーション(3/3)

参加者のコメント

- イランは核兵器を手に入れるだろうが、これでイスラエルを攻撃することではなく、防衛・地域的影響力確保に使うだけだろう。
- イスラエルがイランを攻撃すると、イランの核武装に拍車がかかるだろう。
- 米国は、イスラエルの安全保障を手伝うことはあっても、直接イランを攻撃することはないだろう。
- ロシア・中国が反対することにより、国連の制裁は大きな効果をもたらさないだろう

ハーバード大でのシミュレーション(1/3) 参加者

- オバマ: Nicholas Burns
 - 元米国国務次官 現ハーバード大学教授
- ネタニヤフ: Dore Gold
 - イスラエルの元国連大使
- イラン全般: Gary Sick
 - コロンビア大学教授 中東情勢アナリスト)
- オーガナイザー(コントロール): Graham Allison
 - ハーバード大のディレクター。核アナリスト

S. Wilke. "Iran Game Stimulates Policy Discussions with Sobering 'What Ifs'." Belfer Center Newsletter
, Belfer Center for Science and International Affairs, Harvard Kennedy School, Spring 2010.
<http://belfercenter.ksg.harvard.edu/publication/19962>

/iran_game_stimulates_policy_discussions_with_sobering_what_ifs.html (2010年11月1

ハーバード大でのシミュレーション(2/3) 結果 (2010年暮れまで)

- イランは低濃縮ウラン生産倍増、兵器化も大幅進展
- イスラエルはイランに対する軍事攻撃を示唆
 - 米国は攻撃に強く反対、二国間関係が緊張
 - 実際に攻撃するまでには至らなかった
- 米国・国連は、ロシアと中国の反対によって、イランに強い制裁を課すことができない
 - むしろ、ロシアと中国はイランと交渉
- イランの核保有の権利自体は攻撃されなかった
- イラン自身の外交アクションはさしたる意味を持たなかった

テルアビブ大でのシミュレーション(3/3)

参加者のコメント

- このシミュレーションの勝者は、誰が見てもイランである。米国は敗者だ。
- このままいけばイランが核兵器オプションを入手するのは当然であり、それを防ぐには根本的変化が必要だ
- 米国の政策は、イランの核保有を防ぐというものから、核保有したイランを想定したものに変わるだろう。
- イスラエルは、引き続きイランの核保有が防がれるべきだと信じ続けるだろう

ブルッキングス研究所でのシミュレーション(1/4) 参加者

個人名は明らかにされていない

- 米国チーム
 - 米国政府や軍の上級ポストについていたことのある約10人
- イスラエル・チーム
 - イスラエルの意思決定機関にパイプのあるアメリカ人6人
 - イスラエルに長期間滞在した人物も含む
- イラン・チーム
 - イランを専門とするアメリカ人6人
 - イランに居住したことがある、または頻繁に行き来したことがある人物や、米国政府内でイランに関する政務を行ったことのある人物からなる

K.M. Pollack "Osiraq Redux: A Crisis Simulation of an Israeli Strike on the Iranian Nuclear Program",

The Brookings Institution Middle East Memo No.15, Feb.2010.

http://www.brookings.edu/reports/2010/02_iran_israel_strike_pollack.aspx (2010年11月1日閲)

ブルッキングス研究所でのシミュレーション(2/4) 設定

- イスラエルがイランの核関連施設を攻撃したという前提からスタート
- 攻撃は全面的に成功し、核施設は完全に破壊されるものとした
- イスラエルは、米国に事前に相談しなかった

ブルッキングス研究所でのシミュレーション(3/4)

結果

- イランはNPT脱退、さらにヒズボラ・ハマースを使ってイスラエル・欧州をテロ攻撃
- イスラエルは攻撃後、米国の強い圧力により動けなくなり、テロ攻撃への反撃もできなかった。これにより、国内世論の強い逆風にさらされ、経済も停滞した。
- 米国は、対イラン関係改善をめざして交渉→イランは無視
 - イスラエルから事前に通告がなかったことを強調
- イランがサウジアラビアのダーラン空爆とホルムズ海峡への爆雷敷設をきっかけに、米国が対イラン戦参戦

ブルッキングス研究所でのシミュレーション(4/4) レポートによる考察

- イスラエルの最初の攻撃が大成功だったため、そして、それに対するイランの行動が過激だったため、このシミュレーションの結果が特に極端になったと思われる
- イランは国内の核施設と引き換えに、以下のものを得た。
 - 国内の反対派を完全に抑えこむことができた
 - イスラエルを困難な立場に追いこんだ
- イラン・チームには、現実にはイランの意思決定にかかわった者はいない。これがこのシミュレーションの妥当性の限界のひとつである。

シミュレーションの特徴

- アドバイザーの意見よりも客観性がある
- 様々な考えの人間を参加させることによって、客観性が増す
- 何度も、様々な構成で実験することにより、さらに客観性が増し、統計データとなりうる
- コンピュータを用いたシミュレーションの場合は、一層客観性が増す